

ミュージアム・コンサート

## 南 紫音 (ヴァイオリン)

### 曲目解説

#### イザイ:無伴奏ヴァイオリン・ソナタ 第2番

ハンガリーの巨匠ヨーゼフ・シゲティのバッハ演奏に触発されて 1924 年に書かれたのが、イザイの「無伴奏ヴァイオリン・ソナタ 作品 27」(全 6 曲)。各曲は高名なヴァイオリニストに献呈され、第 2 番はフランスのヴァイオリニスト、ジャック・ティボーに捧げられた。

全 4 楽章に標題が与えられており、全編を通じて古い聖歌「怒りの日」の旋律主題が形を変えて現れる。第 1 楽章は「妄執」という副題を持つ前奏曲。冒頭に J.S.バッハ「無伴奏ヴァイオリン・パルティータ 第 3 番」の第 1 楽章プレリュードが引用されている。第 2 楽章は「憂鬱」と題された緩徐楽章。弱音器をつけた 2 声で、憂愁を帯びた美しい旋律が奏される。第 3 楽章「影たちの踊り」は変奏形式。第 4 楽章は「フリ」(ローマ神話における復讐の女神たち)の名が記された、激しく情熱的なフィナーレで、バッハへの並々ならぬ「執着」を感じさせる。

#### J.S.バッハ:無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ 第3番

《無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ》(全 6 曲)は、バッハの器楽曲の名品が生まれたケーテン宮廷楽長時代(1717-1723)前半の所産とされている。

3 曲あるパルティータには、楽章の大半に舞曲の名称が見てとれる。このパルティータ第 3 番には、軽快で明るい印象の舞曲が並ぶ。第 1 楽章プレリュードは華やかに始まり、第 2 楽章ルールでは抒情的な旋律が美しく歌う。第 3 楽章ガヴォット・アン・ロンドーは有名な曲で、単独で奏される機会も多い。第 4 楽章には親しみやすい旋律の第 1 メヌエットと、対照的に柔らかい雰囲気第 2 メヌエットが並ぶ。第 5 楽章は軽やかなブーレ、続く第 6 楽章はさらに快速なジグとなり、全組曲を締めくくる。

#### バルトーク:無伴奏ヴァイオリン・ソナタ

1940 年秋、アメリカに亡命したバルトークは、1943 年末、若きヴァイオリニスト、ユードィ・メニューインと出会う。本曲はメニューインの委嘱を受けて書かれた。1944 年に短い期間で完成し、同年、カーネギー・ホールでメニューインにより初演された。線のな書法に熟達した傑作であり、死の前年に書かれたこともあり、バルトークの到達点を示す作品の一つとされる。

4 楽章構成。「シャコンヌのテンポで」と記された第 1 楽章はバッハが強く意識されており、

ハンガリー民謡調の主題と 10 の変奏およびコードからなる。第 2 楽章は 4 声部によるフーガ。いわゆる「バルトーク・ピツィカート」(弦を強く引っ張って指板に打ちつける)が現れる。第 3 楽章は三部形式。緩やかな旋律に乗ったフラジオレットが神秘的で美しい。ロンド形式の第 4 楽章は 16 分音符による無窮動的な主題を中心に、リズムカルな舞曲調の主題と静寂な主題が交錯し、情熱の度合いを高めていく。